

## 聖母の被昇天

ルカ 1・39-56

高円寺教会 2017.8.15 18:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

この世に生まれた命に上下はなく、全て尊いものです。命に歪んだ価値付けをするのは神様のほうではなくて人間の弱さです。それによって、社会あるいは世界の中で、悲劇的なことが行われることとなります。日本の場合ですと、1965年に始まった優性保護法によって、墮胎というのが社会の中で許されました。墮胎はとても重たい決断ですし、やむを得ず選ばれる方もいらっしゃるのかもしれませんが。しかし結果的に、生まれてもよい命と生まれては行けない命というものがそこで区別されてしまいます。運よくこの世に生を受けても、無条件に祝福されることはなく、いろんな条件が付けられます。

こうして、生きるにふさわしいかどうかをいつも問われ、命に格差が付けられてきます。命は全て尊いものであるはずなのに、人間の弱さというものが、神様から与えられた全ての命に対して格付けをするということをしてしまいます。

72年前に終わった戦争の中では、命令するほうの命は守られるべきもので、命令されるほうの命というのは消費されても良いものだと考えられた。戦争は終わったのですが、今の社会の中にもその価値は引き継がれています。尊い命と尊くない命というような差別がいつのまにか人間の側で勝手に決められている。それが人の尊厳を教えるべき学校の現場の中でも当たり前になっている。

学校を卒業し、会社に出ても正規雇用と非正規雇用だということで差別される。

この世の価値にまみれた言葉に耳を傾けず、神様のことばを聞いたわたしたちは、マリア様と同じように、イエスを宿すこととなります。この世の偉い人の声を聞くためにはそれ相応に偉くなければなりません。偉くないならお金を出してチケットやパーティー券を買ったり、この世に実績を残したりして自分の尊さをアピールしなければなりません。しかし神のことばは無条件にどの人に対しても語りかけてくださいます。

わたしたちは尊いのちのことばを聞いたにも関わらず、イエスに対して条件を付けたりすることがあります。「この世の不幸を全て取り除いてくれないなら、あなたなんか信じるに値しない」。あるいは、「今すぐ十字架から降りてこい。そうすれば信じてやる」など。

イエスに条件を付ける人は、本人も気づかないところで、偉い人間になることをあこがれています。偉くなった人間はやがて人の命に新しい格差を生じさせます。人祖アダムとエワは神のことばではなく、この世の言葉に耳を傾け、神を否定することでこの世に不幸をもたらしました。人が神よりも偉いと考えたら、命に歪んだ価値づけをおこない、神が与えてくださった命を粗雑に扱うようになります。

戦争で亡くなった人や災害で亡くなった人、それから、社会でいじめられて自死を選んだ人というのは、命に条件などいらないことを教えてくれています。その人たちの命を無駄にしてはならないというのであれば、自分も含めて、生きている命に対して条件なしに尊いものであるという実感がなければなりません。

マリア様は、イエス様のことばを聞き、不平等を当たり前とする社会の中で神様のことばに従いました。そして、祈りの中で、社会の中にはびこるそのような価値観をはっきりと否定される、それが今日のマグニフィカト (Magnificat) の中ではっきりと語られています。イエスが自分を無になさったように、マリアもはしためとしての生き方を貫きました。やがてイエスと同じように天に高められてことをわたしたちは今日お祝いしています。すべての命が神様によって祝福されていることを実現するために、イエスやマリアのように弱い者の側に立つ恵みが与えられますように共に祈りましょう。